

# 2019 年度北サッカラ調査における 動物遺存体とミイラに関する調査概報

サリーマ イクラム\*

Brief Report on Work Carried Out During the 2019 Season of  
the Japanese-Egyptian Mission to North Saqqara

Salima Ikram\*

## Abstract

Work was carried out on two major groups of objects: animal remains and human mummies. In the case of the animal remains, the work focused on loose bones as well as mummified animals. For the mummies, attention was paid to both the creatures that were mummified as well as the techniques of mummification. For the human mummies, the focus was on their mummification.

## 1. はじめに

本稿では、日本・エジプト合同サッカラ調査隊の第3次から第5次調査にかけて出土した動物遺存体、人間のミイラなどに関する調査の概要を報告する。動物遺存体については、骨片とミイラについて分析を行った。特に動物のミイラについては、ミイラ化された動物の種類とそれらのミイラ製作の技術について焦点を当てた。一方、人間のミイラについてはミイラ製作技法について焦点を当てた。

## 2. 動物のミイラ

いくつかの異なる出土コンテキストから動物のミイラが発見された。その大部はイヌのミイラである。それらの残存状況は、あまり良好ではないが、ミイラ製作技法の情報を得るには十分であった。

動物のミイラの多くは、第4次調査において発掘区 Area 1、2の西端、斜面上部に位置するタフラ⑧層から出土したものであり（河合他 2020a: 21）、26体のイヌのミイラと数体のネコのミイラが確認された（写真1）。イヌのミイラの中にネコのミイラが混ざるとは他遺跡でも見られ、近隣のアヌビスのカタコンベでは、イヌのミイラの中にネコやマンガースのミイラも混ざっていた（Ikram et al. 2013; Nicholson et al. 2015）。出土したイヌのミイラは、子犬から成犬まで多岐にわたるが、多くは1歳以下の年齢であった。この傾向はアヌビスのカタコンベやアシュートのイヌの墓地でもみられる（Kitagawa 2016）。興味深いことに、1体のイヌのミイラ（NS04-o00435）では、肋骨が異なる部分で2回折られており、その後に修復されていた。肋骨の破損と修復の性質を考えると、人間が肋骨の治療に関与していたかどうかは不明である。

動物の毛皮の色は一様ではない。大部の毛皮は黄色系の茶色で、いくつかは焦げ茶色であったが、1つは、黄色と黒色のまだら模様であった。これは、おそらくミイラ製作時になされたのかもしれない。

出土した動物のミイラの製作技法は比較的良質であった。これは、比較的温湿度の変化が激しいアヌビスの

\* カイロ・アメリカン大学社会学エジプト学人類学科教授

\* Professor, Department of Sociology, Egyptology and Anthropology,  
American University in Cairo



写真1 第4次調査で出土したイヌのミイラ  
Pl.1 Dog mummy found in the fourth season

カタコンベの出土のものよりも良質である。本調査区から出土した動物のミイラは砂の中に包含された状態で発見されており、本来別のカタコンベ由来だとしても別の年代のものと思われる。動物は、ナトロンや一種の塩類を用いて乾燥化され、樹脂あるいは香油が塗られた後に、亜麻布で巻かれたようである。そして、それは樹脂と香油を混ぜた暗色の樹脂のような液体に浸漬された。暗色の物質に浸漬された亜麻布の詰め物は、胎内、特に腹部と四肢の間に詰められた。いくつかの動物のミイラにはパピルスの茎が使われ、1体の断片となったミイラからは原位置で確認された。この例では、イヌの四肢はパピルスの条片で姿勢が維持され、その上から亜麻布が4層にわたって被せられていた。おそらく、より多くの亜麻布が巻かれていたと思われるが、原状を留めていないのであろう。パピルスは、ローマ支配期のコム・メレフ出土のガゼルのミイラで使用されていたことが知られている (Ikram and Iskander 2002) <sup>1)</sup>。他の動物のミイラでパピルスが使用された例では、ファイユームのディール・アル＝バナート出土の仔牛やイヌに認められる (Ikram and Iskander 2002; Ikram 2013)。

保存された遺体から、イヌ（そしておそらくネコも）は、標準的な姿勢をしていたと考えられる。つまり、座って、後ろ足を少し押し上げて、前足が胴体の長さに沿って横たわった姿勢である。尾（しばしば別々に巻かれた）は後脚を通して引っ張られ、腹の上に置かれた。

すべての動物のミイラが良好に製作されたわけではない。1つの例 (NS04-o00430) では、いくつかのハエの蛹が毛皮に入っていた。ハエの蛹が集まって遺体がミイラ化する前に死んで腐食し始めたか、ミイラ製作者が遺体をナトロンで十分に覆っていなかったため、ハエが死体に侵入できるようになったと考えられる (Ikram 2015a)。

1匹のミイラはやや異常で (NS04-o00434)、それは、涙状の形をしていた。この形はトキの埋葬でより一般的である (Ikram and Iskander 2002)。X線撮影は行っていないため、実際に鳥のミイラであるか、または一部の子犬のミイラがこの方法で包まれていたかは不明である。

これまで出土した全ての資料を調べたわけではないが、これらはおそらく北サッカラにおけるアヌビスの祭祀に関連していたと考えられる。同じような例は、P. ニコルソン (Nicholson) のチームが調査したカタコンベに加えて、J. ド・モルガン (De Morgan) によって作成されたサッカラの地図 (De Morgan 1897) 上にマークされた2番目のカタコンベ、テティ王のピラミッド複合体のイヌの埋葬、そしてテティ王ピラミッド墓地 (Hartley et al 2011)、2017年から2019年にエジプト隊によって発掘された北サッカラ台地の崖際の初期王朝時代のいくつかのマスタバ墓での埋葬が知られている<sup>2)</sup>。明らかに、サッカラのこの地域全体は、イヌが圧倒的に多い動物の埋葬地で溢れている。これらの祭祀は、地域の宗教的、社会的、文化的、経済的生活 (Ikram 2015b) で重要な役割を果たしていたと考えられる。

### 3. 動物遺存体

2017年に実施した第3次調査 (河合他 2018) で出土した一連の動物遺存体の調査も実施した (写真2)。これらにより、ヒツジ、ウシ、ブタ、ナイルパーチ、ヤギなど、さまざまな種が確認された (表1の最小個体数を参照)。遺存体の大部分は、あらゆる年齢のヒツジの角核と四肢骨であった。ヒツジは、オスとメスの両方が含まれていた。またヤギ由来の角が2点確認された。ブタについては、若いブタ (2歳未満) と高齢ブタ (3.5歳以上) の両方が含まれていた。少数のウシの遺存体は、若い動物の (抜け落ちた) 歯で構成されており、単

表1 各動物遺存体の最小個体数  
Table 1 Minimum number of individuals of each taxon

ヤギ	ヒツジ	ブタ	ウシ	ナイル・パーチ
19	2	5	2	1



写真2 第3次調査で出土した動物骨  
Pl.1 Animal bones found in the third season

一の個体に由来している可能性がある。発見された唯一のウシの骨は踵骨と中足骨の一部だったが、骨はどちらも骨端が欠けていたため、年齢は特定できなかった。これらの遺存体で特に印象的なのは、角の数である。その多くは、おそらく屠殺場に関連したチョップマークを示していた。角は成熟した動物のもので、珍しい。ヒツジの骨も通常よりも大きく見えたが、完全な骨端の数が不十分であり、年齢を特定する測定ができないため、通常よりも大きいという印象は、科学的ではなく、直感的に考えたものである。

#### 4. 人間のミイラ

2019年の第5次調査では、発見されたローマ支配期のカタコンベの東側から数多くの人間のミイラ化された遺体が発見された。人類学的な所見は、馬場悠男博士と坂上和弘博士によって報告があるが（河合他 2020b; 坂上、馬場 2020）、ここではミイラ製作に関する所見について述べたい。

##### (1) NS05-o00877 (写真3)

身長 170cm、肩幅 35cm、臀部幅 33cm

埋葬姿勢は仰臥位。南北方向に埋葬。頭位方向は南向き、顔は東向きであった。腕を伸ばし、左腕を腰に、右腕を体の側面に沿って配置していた。足首と膝は亜麻布のストリップで結ばれていた。手首や腰には何も特徴的なものは認められなかったが、おそらく風化していたと考えられる。包帯の下では、ほとんどの場所で皮膚は確認できなかった。それは、粉末になったか、高温の樹脂/香油を塗布することによって焼失し、骨だけが残ったためと考えられる。しかし、髪は残存しており、色は薄茶色で、端は整然と切り取られていた。塩類（またはおそらくナトロン）のように見えるものが髪の一部に確認された。頭は少なくとも12層の亜麻布で非



写真3 単純埋葬 (NS05-o00877)  
Pl.3 Simple burial (NS05-o00877)

常によく覆われており、そのうちのいくつかは黒い樹脂状物質で含浸されていた。包帯の一部が脱落すると、顔の皮膚にわずかな量の金箔が残っていた。おそらく本来はより多くの金箔が覆われていたが、残存しなかったとみられる。金箔はプトレマイオス朝の年代を示唆する。

腕は7～10層の亜麻布の包帯で覆われていた。最も外側の包帯は幅が広く、平均12cmであった。かなりの量の樹脂/香油がミイラの包帯の上に塗られ、それらを通して浸透した部分がいづつか確認された。第21王朝のイシスエムケブD王妃のベット用ガゼルで指摘されているのと同様に、体腔がゆるい砂で満たされているようであった (Ikram and Iskander 2002)。胃の上の部分には、少なくとも12束の樹脂の塗られた亜麻布が身体に押し込まれていた。遺体は腸が抜かれたようである。異なる品質の亜麻布が身体全体に使用され、その大部分はかなりしっかりした中間品質の亜麻布であった。

#### (2) NS05-o00884 (写真4)

頭蓋骨の断片、茶色の髪、一部は油のシミが付着。粗い亜麻布が巻かれ、また手足の部分にはミイラ化は見られない。なお、坂上博士は15～17歳の男性としている。

#### (3) NS05-o00889 (写真5)

男性の遺体。仰臥伸展葬のミイラ。頭位方向は、南向き。南北方向に埋葬され、顔は西向きであった。腰の骨や恥骨に腕をかけている。一部の短い髪は頭に残存しており、ナトロンの残留物もあった。頭は足より高いが、体が斜面に埋もれていたため、これが意図的かどうかは不明である。左上腕骨が骨折した後に治癒し、椎骨がしわになっていた。体は亜麻布の包帯で覆われており、胸部の心臓部分には植物性材料の塊が確認された。この遺体もコプト時代に年代づけられる可能性がある。コプト時代のミイラは、一般的には質が高いものの、植物性の物質が含まれていることが多いためである。

#### (4) NS05-o00890 (写真6)

身長168cm、肩幅29cm、臀部幅36cm

仰臥伸展葬のミイラ。頭位方向は北向き。南北方向に埋葬され、顔は西向きであった。頭部には油や樹脂が付着した焦げ茶色の髪の毛が確認された。腕の位置は不明瞭だが、おそらく体の側面に沿っていると思われる。頭は意図的に上げられているようである。膝はハルファ製の縄で結ばれていた。ただし、足首が同じように処理されていたかは不明である。頭部については、他の部分よりも包帯が厚く巻かれていた。右腕は最初に幅広の布で縦方向に包まれ、水平に螺旋状に包まれた幅の狭い包帯が肘に追加され、手首まで垂れ下がっていた。包帯のいくつかは、赤い縁のある白あるいはベージュ色であり、そのうちのいくつかは非常に狭くテープのようである。このミイラはコプト時代に年代づけられると考えられる。

#### (5) NS05-o00912 (写真7)

仰臥伸展葬の遺体。頭位方向は南向きである。亜麻布はほとんど残存しておらず、樹脂/油の痕跡も確認されなかった。他の遺体よりも華奢である。



写真4 単純埋葬 (NS05-o00884)  
Pl.4 Simple burial (NS05-o00884)



写真5 単純埋葬 (NS05-o00889)  
Pl.5 Simple burial (NS05-o00889)



写真6 単純埋葬 (NS05-o00890)  
Pl.6 Simple burial (NS05-o00890)



写真7 単純埋葬 (NS05-o00912)  
Pl.7 Simple burial (NS05-o00912)

## 註

- 1) これらはプトレマイオス朝時代末期からローマ支配期前期に年代づけられている (Richardin et al. 2017)。
- 2) ラシャ・ナセル氏からの情報と自らの観察による。

## 参考文献

Hartley, M., Buck, A. and Binder, S.

- 2011 “Canine Interments in the Teti Cemetery North at Saqqara during the Graeco-Roman Period”, in Bárta, M., Coppens, F. and Krejčí, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2010*, Prague, pp.17–29.

Ikram, S.

- 2013 “Man’s Best Friend for Eternity: Dog and Human Burials in Ancient Egypt”, *Anthropozoologica* 48, 2, pp.299–307.  
 2015a “Experimental Archaeology: From Meadow to Em-baa-lming Table”, in Graves-Brown, C. (ed.), *Egyptology in the Present: Experiential and Experimental Methods in Archaeology*, Swansea, pp.53–74.  
 2015b “Speculations on the Role of Animal Cults in the Economy of Ancient Egypt”, in Massiera, M., Mathieu, B. and Rouffet, F. (eds.), *Apprivoiser le sauvage - Taming the Wild: Glimpses on the Animal World in Ancient Egypt*, Montpellier, pp.211–228.

Ikram, S. and Iskander, N.

- 2002 *Catalogue Général of the Egyptian Museum: Non-Human Remains*, Cairo.

Ikram, S., Nicholson, P., Bertini, L. and Hurley, D.

- 2013 “Killing Man’s Best Friend?”, *Archaeological Review from Cambridge* 28, 2, pp.48–66.

Kitagawa, C.

- 2016 *The Tomb of the Dogs at Asyut: Faunal Remains and Other Selected Objects*, Wiesbaden.

De Morgan, J.

- 1897 *Carte de la Nécropole de la Memphite: Dahchour, Sakkarah, Abou-Sir*, Cairo.

Nicholson, P.T., Ikram, S. and Mills, S.

- 2015 “The Catacombs of Anubis at North Saqqara”, *Antiquity* 89, 345, pp.645–661.

Richardin, P., Louarn, G., Berthet, D., Ikram, S. and Porcier, S.

- 2017 “Cats, Crocodiles, Cattle, and More: Initial Steps Toward Establishing A Chronology of Ancient Egyptian Animal Mummies”, *Radiocarbon* 59, 2, pp.595–607.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

- 2018 「第3次北サッカー遺跡調査概報：試掘調査」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.82–112.

河合 望、吉村作治、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美、サリーマ イクラム

- 2020a 「第4次北サッカー遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.12–31.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、馬場悠男、坂上和弘、サリーマ イクラム

- 2020b 「第5次北サッカー遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.32–61.

坂上和弘、馬場悠男

- 2020 「北サッカー遺跡出土の単純埋葬遺体の形質人類学的調査」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.62–65.



エジプト学研究 第26号

2020年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.26

Published date: 31 March 2020

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist